

自由と、無秩序

いままで、あまりふれてこなかった個人主義的アナキストについて述べてみよう。

個人の自由をめざすアナキストにとつて、個人の自由はやがて全体の自由に結びつくという意味では、爆弾ストライキなどの大衆運動と同じことであつた。彼らの行動は例によって、それぞれ異なつていたが、求めているものはひとつであつた。無知、迷

信、道徳的偏見からの自由である。

「自由」からの「自由」というのはむしろ消極的な表現であり、より積極的に表現するなら、教育を改善し、既成の宗教によつて決められた善悪にとらわれず、各人が自由に善悪を考えることができる社会を求めたといふべきだ。

アナキズムは、たびたび「物質とセツクスが自由になる」「夢」の社会」と反対論者は非難したが、まさにこれはアナキズムの「理想」を正確に表現していたわけでもあつた。

アナキストの「教育」の理想

宗教と政治権力が剥奪したフランススコ・フェレルの名は、「アナキストと教育の間

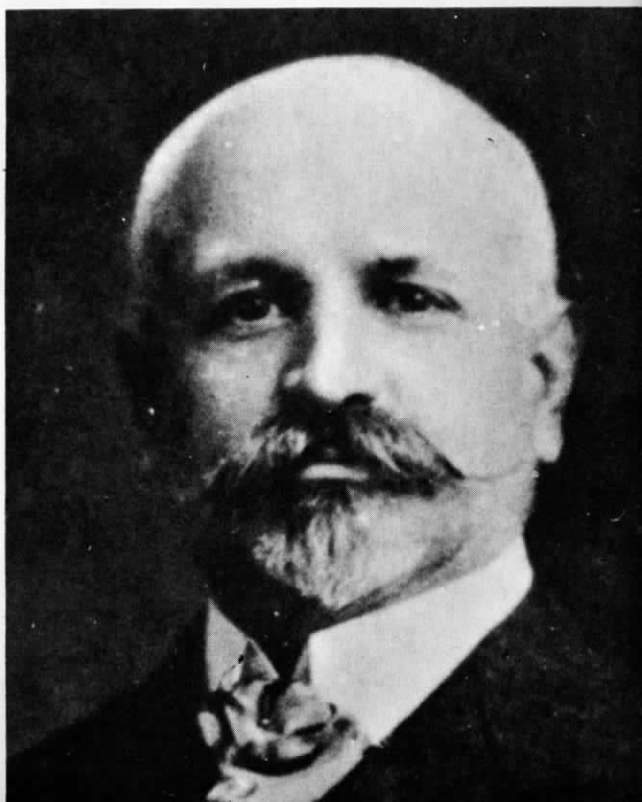
題」を語るとき、欠かすことのできない名前である。生前にも自由論者の間では知名度が高く、彼がバルセロナにつくつた近代学校は各国でまねられるほどであつた。フェレルは熱心なカトリック信者の農夫の息子として生まれたが、はじめての職場で無神論者であつた雇い主に強く影響され、しだいに反教会を唱えるようになった。

彼はスペインでの共和主義者の革命に参加した罪で、国外追放の身となり、一八八六年から一九〇一年にかけて、パリで生活していたが、そこで彼の教育への理念が育てられた。

フランスの公立学校に興味を持った彼は

左 一九世紀後半から二〇世紀初期における学校の教室風景。アナキストは、この厳格な教育に反発して、子どもの勉強に対する意欲を素直に引き出す新しい教育を主張した。





それが、政治にしばられていることを非難したが、反面、それが宗教からの自由であることを賛美していた。また公立学校以外にも、アナキストであるポール・ロビンが経営していた孤児院に興味を持った。

ロビンは、親の貧困や無知が、そのまま子どもの人生を暗い苦しいものにするものにはならないと信じていた。彼は「自然に囲まれた生活と思いやりのある教育」を旗印に、生まれつきの環境や遺伝による悪影響から子どもたちを救おうとした。

エマ・ゴールドマンの言葉によると、「彼は場所を選ばず子どもを連れてきた。道ばたから、あばら家から、少年院からできるだけの子どもたちを連れて来た」

そして自然にかこまれた環境で、ロビンはその教育者としての才能を傾けて、子どもたちの悲惨な過去と戦いつづけた。

このロビンの孤児院を、微細に観察したフェレルは、彼独自の教育理念を生みだした。一九〇一年、スペインに帰国した彼は子どもたちをすべての政治的、宗教的、道徳的偏見から解放する学校を夢みていた。

その近代学校は「啓蒙思想」の精神、ルソーの思想、そして科学以外に知識への道は無いと主張する「実証主義の伝統」に強く影響されていた。もちろん、スペインの教会からは強い反感をかかった。

「理性教育は、まず宗教教育をまったく無視するところからはじまります。天地創造は、たんなる神話であり、神の存在は迷信であることを科学は証明しているのです。そして知能を完全に自己のものとして所有できる個人を造ることです。ですから、私たちの教育は、政治はなんら関係なく行なわれるのです。政治というのは、知能を自

右上、近代学校の創立者、フランシスコ・フェレル。右下、ハチの巣の創立者、セバスチャン・フォーレ。左、スラム街の子どもたち。フェレルとフォーレは、この子どもたちの暗い過去と教育を通して戦った。

己のものではなく、他人のために使わせるからです」

では、この学校の教育の基礎となるものはなんだろうか。フェレルによると、「教育の価値は子ども肉体的、知能的、道徳的意思を尊重するところにある。真の教育者は子どもたちを、自分（教育者）の思考や好みからも守ることができる。そのような教育者こそ、子ども自身の可能性を引き出すことができる」

要するに、「教える」より「憶える」と、またうるさいしつけにしたがって、子



定どおりに教育を進めるより、子どもが自分の能力に応じて、自由に学ぶことに重点がおかれていた。これはスペインの固定的な教育システムからみれば、非常に革命的なものであった。しかしこの理論を押し進めていくと、子どもが宗教に興味を持たず、その興味をのばしていく自由もあるはずである。

ところが、強烈な無神論者であったフェレルは、そこまでは認めなかった。彼にとつて、自由とは宗教のアンチテーゼであった。子どもは自然であり、自己主張をし、また自由であるべきなのだが、これはすべて「非宗教的」というわくの中でのことであつた。

やがて、彼の反教会主義は、あるカトリック信者で金持ちの夫人を説得するまでに至つた。その女性が死んだとき、彼女は遺

産を彼に残したため、近代学校は金銭的にも安定した。しかし、その金も政府と教会の弾圧から、彼の学校を守ることはできなかった。

一九〇六年、フェレルは、アルフォンソ王と女王に対し、爆弾を投げた件で、共犯者として捕えられた。その爆弾は彼の学校の図書館員の投げたもので、彼自身は無罪となつたが、近代学校は廃校にさせられた。三年後、前に述べたバルセロナの反乱で、フェレルは処刑されてしまった。

スペインでは、もちろん、このフェレルひとりではなく、アンダルシア地方のアナキストたちも学校設立に努力していた。

しかし、それらはほとんど成人教育を主体としたものであつた。これは、前にのべたロビンの成功が原動力となつて、「自由教育連盟」(一八九七年)が結成されたが、最初

この連盟は子どもの教育に熱意を入れていた。連盟で集めた資金をもとに、ふたりのアナキストが一九人の少年少女をいなかにつれて行き教育したが、ひとりの先生が子どもたちをぶつようになり、連盟の理想はくずれ去つた。

この失敗が、連盟の方針を子ども教育から、成人教育へと向かわせた原因となり、各地で、特色ある教育が行なわれるようになった。

マラガ地方では、女性教育協会が二万人の農民を教育していたし、また一方、バルセロナでは、戦闘的なアナキスト、マルモールらが、技芸学校を開設していた。

左 ロンドンのシドニー街にたてこもつた無法者の一回を包圍する軍隊。この無法者の一回は、アナキストと目されて、射殺されたが事件後の調べて、無関係であることが判明した。



フランスのアナキズム、教育

フランスで、いろいろとヒントを得た、このフェレルの理念は、逆にフランスのアナキズム運動に反映されるようになった。

フランスのアナキズム運動の第一人者、セバスチャン・フォールは、一九〇四年に「蜂の巣」をつくり、三年後には、近代学校のフランス版ともいえるほどに成長した。

彼は孤児と貧困家庭の子どものために田舎に住居を用意して、そこで、その子どもたちを教会と政治の悪から守ろうとした。成績順に子どもたちを分けるようなことはせず、先生（アナキスト）も無給で働き、必要なお金は、共同資金からそれぞれ自由に引き出していた。

フォールは「蜂の巣」は子どものために

つくられた未来の学校だ」といい、そこでは実生活に即した社会性のある教育がなされた。たとえば、数学では、いかにして賃金を平均化できるかを解く問題が出されたし、歴史ではフォールのいう「真実の歴史」が教えられた。「真実の歴史」とは、彼の言葉をかりると、「子どもたちに真実の歴史はまだ書かれていないことを説明しなければならぬ。それは人類の栄光のために死んでいった名もない人びとの物語」なのであった。

彼自身の稼ぎ出したものはすべて、この学校の資金にあてられていた。しかし一九一七年、ついに資金不足のため行きづまってしまう、フェレルの近代学校ほど、国際的に知られるまでにはいたらなかった。

ロビンや、フェレル、フォールなどのように、子どもの教育に情熱を燃やした例は

少なく、全体としては成人教育、親の教育に力が入れられていた。これはアナキストの哲学からすれば当然のことである。おとなは自分の意志によって好きなときに学校に来るが、子どもはそうではない。近代学校の四〇人の子どもたちにしても、ときには強制が必要であった。しかし、この強制こそ、彼らの哲学「自由意志」と相反するものである。

成人教育

成人教育の分野ではフェルナンド・ベルティエが最大の指導者であった。彼はす

左 シドニー街の事件で銃を手渡される警官隊。ちなみに、イギリスの警官は、ピストルや銃をふだんはもっていない。



で少年時代に反教会的小説を書き、退学処分をうけ、後に高等学校では天才の証をみせたが、試験で落第し、みずからジャーナリストになるため退学した。そこで多くのアナキズムの書物にふれ、彼の教育に対する情熱が芽ばえていった。

彼の考えでは、労働者は、読書をしないから無知になり、そのため悪い労働条件、低い賃金にも服従的になってしまおうというのであった。したがって、彼の教育の最大の目的は、労働者が自分たちの置かれた立場を理解できるように、またそれを変えていく可能性を見出すよう、指導することであった。つまり、講義とデイスカッションを交えながら、アナルコ・サンジカリストになるよう説得する、宣伝的教育ともいえよう。彼の言葉をかりれば、労働組合は、アナキズムの実際的教育的場であった。事実、

彼のブルス連盟は「人民大学」のように思われていた。

彼の発行した雑誌「ふたつの世界の労働者」は、彼の教育の柱となり、また古くからあった高級学術雑誌「ふたつの世界の評論」に対するライバル誌となった。

もうひとり、成人教育にたずさわったりリーダーとして、ドイツの製本職人、ルドルフ・ロツカーについても記述しておこう。少年時代に、両親を失った彼は、カトリック孤児院にあずけられ、親代わりになった叔父の影響もあって、社会問題について興味を持つようになった。そんな彼に、ピスマルクの反社会主義法は、思想と主義の弾圧であるとして、強い憎しみをいだかせたが、彼は、やがて社会主義者からアナキストへと変わっていった。

アナキストである彼は、ドイツを追われ

最初はパリに、次にロンドンへと逃げていった。そこで彼は、指導者としての力を発揮した。ペルーティエと同じように労働者の知的解放を目指したが、彼の場合は「労働者の友」という新聞をとおして行なった。「労働者の友」は、イディッシュ語の新聞であり、彼はそのために、イディッシュ語を三年間勉強して、その編集員になった。

彼は、ロンドンのイリストエンドで、抑圧と搾取に苦しむユダヤ人労働者のために情熱を燃やし、大きな成功をおさめた。彼の功績は、広く知られるようになり、ユダヤ系労働者の記憶になく残されることになった。ある老いたユダヤ人の言葉をかりると、

「神の恵みを……、あなたは私の子どもた

左 クリスチャン・アナキストといわれたトルストイ。その義妹とともに……。



ちを助けてくれた。あなたはユダヤ人ではないが、男の中の男だ！」

しかし、彼のアナキズム思想が、イギリス社会に完全に受け入れられたわけではなく、第一次世界大戦がはじまると、敵国民として抑留されてしまおうのであった。

イギリス社会でも、アナキストに対する目はきびしかった。一例をあげると、一九一〇年、ハウンスヒッチで無法者の一団が宝石店に押し入り、三人の警官を殺害、シドニー・ストリートのステブニーにたてこもった。当時、内務大臣であったウインストン・チャーチルによって、軍隊が派遣され、一団は大乱闘の末、射殺された。

その前に、一味のひとりが負傷したままある女性の家に逃げこんだ。ところが、偶然にもその女性の家で、マラテスタのサイ入りのカードと、宝石店押し入りのさい

に使ったと思われる工具が発見された。そこで、ただちにこれはアナキスト一味の犯行だとされ、推定が証拠となって、新聞は「黒色革命」の恐怖を書きたてたのだ。実際、その女性は一味とはなにも関係がなく、マラテスタも、機械技師だと名乗った一味のひとりに工具の置いてある場所を教えたにすぎなかった。ロツカーはこの事件になんどの関係もなかったが、やはりアナキストであるとして、彼の行動は警察の目にとまり、しつこく調査された。

クリスチャン・アナキスト

アナキスト教育のパイオニアたちは、ほとんど既成の学校と大学を、反動的で有害なものであると否定した。一部の人は、

もう一步進んで、教育そのものが不自然で威圧的だとした。後者のもつとも有力な人物が、一九世紀の文学者レオ・トルストイであった。

「戦争と平和」の著者、トルストイは、アナキストという言葉は破壊と暴力のイメージが強いため、自分はアナキストとはいわなかった。しかし、彼はたびたび、消極的またはクリスチャン・アナキストなどといわれていた。クリミア戦争の悲劇と、一八五七年の、パリでの処刑に強く動かされたトルストイは、生涯を反権力者としてすごした。

「すべての政権は、伝統と慣習によって正当化され、堂々と極悪な犯罪を力によって犯す複雑な組織である」

彼の論文「我ら何をなすべきか」(一八八六年)の中で、彼は一般市民を堕落させる

という理由で、都市をも否定している。彼はモスクワの貧民街をめぐりに描き、そして、その責任を金持ち、政府、そして教会にむけ、真のキリスト教社会には、政府も教会も存在しないと主張した。それでは、何をどうすればいいのか？ という問いに彼は、

「権力からくるもの、すべてを拒否することです。お金と物の私有化を拒否することです。貧困の原因となる産業には協力しないことです。頹廢の原因となる都市からは立ちのくのです。傲慢の原因となる教育はやめさせるべきです。そして人は、すべておだやかな農村の生活へもどるべきです」と説くのであった。

出版業を営み、良い文学を低価格で出版していたトルストイは、農村に帰る運動のために、みずからも努力した。彼自身、農

村でくらし、自分の子どもたちを、農民とともに働かせていた。そして、たびたび、都市生活の悪を農民に話したりしていた。ときには禁煙をしたことがあったが、そんなときには、農民にも禁煙をすすめ、穴を掘って、そこにタバコを捨てるように指導したこともあった。

一八七〇年代には、何千人もの人が都市をすて、農村生活にはいった。しかし、その多くは、現実の農村生活にふれると、あまりにも不自由で、たいくつだったため、長つづきしなかった。一方、農民の方も、この招かざる客を疑惑の目で見て、ロシア皇帝のスパイのように扱った。

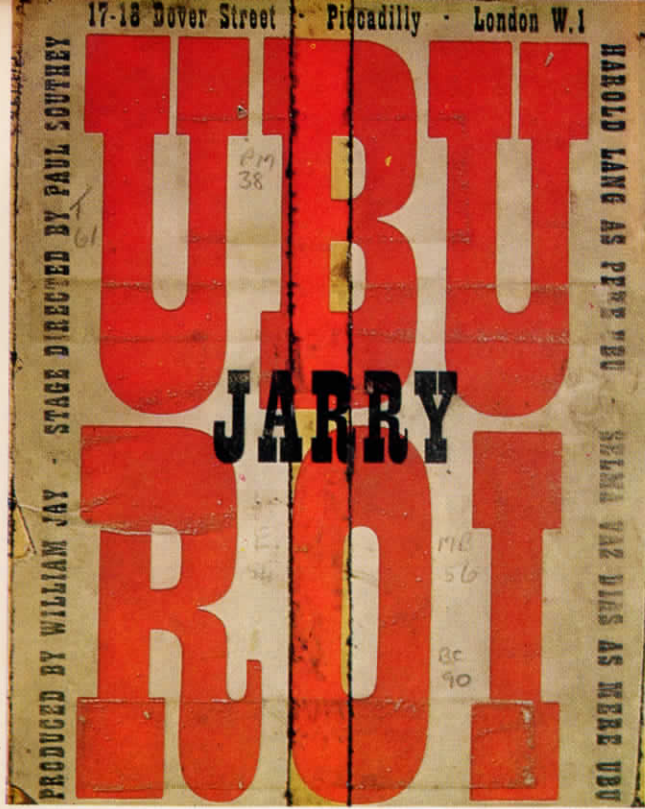
しかし、トルストイは農村生活のよさについてまでも信じてつづけた。農村学校を描いた本の中で、農家の子どもたちの自然の知恵について、彼は書いている。

「子どもたちが床にひっくりかえりながら苦しい！ やめる、手をひっぱらないで！ などとさわいでいるところへ先生がはいってくる……『ペテロ・ミヤロピッチ先生』ひとりの声が重なり合った子どもたちの下から聞こえてくる。『やめさせてください』

『おはようございます』とほかの子どもたちが、ゲームをつづけながらさけぶ。先生は本棚へ行き、ついてきた子どもたちに本を手渡す。かさなり合っている子どもたちで、上にいるものは、そのままの姿勢で本を求めぬ。かさなりあった子どもは、だんだん小さくなっていく。半数以上の子どもが本を持ったとき、残りが本棚へかけよっていく。『ボクも！ ボクも！』きの

左 家族と朝食をとるトルストイ(ヤスナヤ・ポリヤーナにて)。彼はここで農民の子どもたちを集めて学校を開いた。





アナキズムと芸術

アナキストたちが、政治と社会にその目を向けているあいだに、芸術の世界でも、芸術家たちが既成の価値観を捨て、自分の作品を通して、社会変革を呼びかけるようになっていた。ピサロやシニャック（本文101ページと103ページ）のような、印象派や後期印象派の画家たちは、技術的な面から新しい分野を切り開いていった。これが、その後にくるシュール・レアリズムやダダイズムが、ブルジョワの偽善や既成観念を粉砕するという、アナキー精神にうけつがれていった。ハウプトマンやベデキンらの作品に刺激された作家たちは、芸術や文学は、社会的な目的に役立つものでなければならないというアナキストの本質を育てあげていった。

写真下 ダリの「アンダルシアの犬」の一場面。左 ジュネの「衝立て」の服装。左上 ダダの初期の展覧会のポスター。左 上 論議的になったジャリのUbu Roiのポスター。



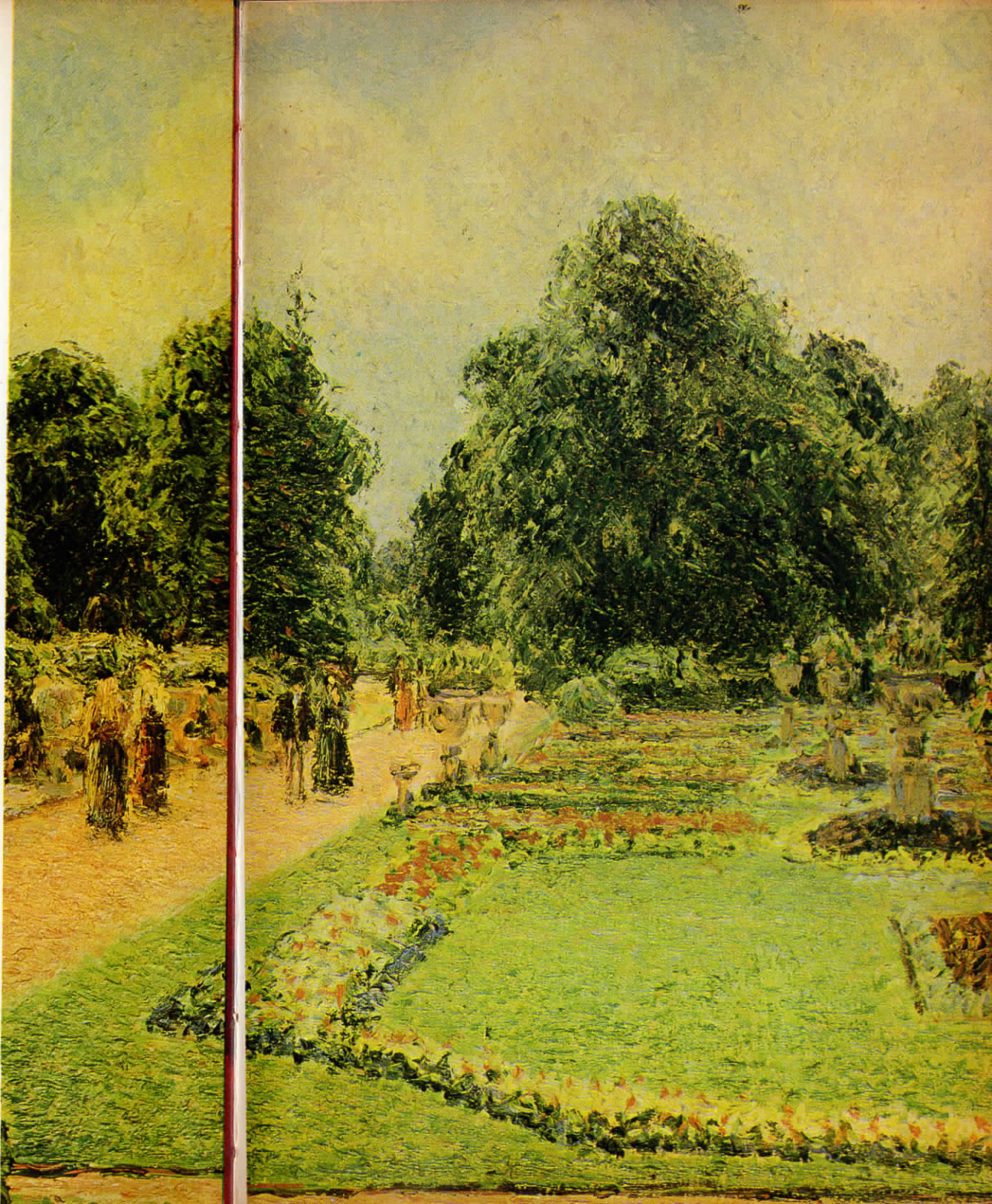
うの本をちようだい」などとたのむ。もし二、三の子どもたちが興奮からさめきれないで、床にころがり続けていれば、ほかの子どもたちから、「しずかにして！ 何も聞こえないじゃないか！ やめろよ！」などと制止の声があがる。すると、その子どもたちもふざけるのをやめて、息を切らしながら本を受け取る。興奮の名ごりとしていすにすわっても、足をぶらぶらさせるのは最初のうちだけのこと。やがて、闘争心がなくなり、勉強心が教室全体を包む」

いくように解決する「農村教育」だけは、特別認めていた。彼は都市の学校で行なわれているような子どもたちを自然の好みから強制的に遠ざけ、日常生活の真実に関係のない思考をうえつける教育に対して反対していたのだ。この意味では、前にのべてきたほかのアナキスト教育者と同じである。

教えとは、まったく違うものになってしまった、と主張するのだった。一九一〇年に、彼は弟子のガンジーに送った一通の手紙の中で、「キリスト教の愛の法」と「現実の政府や軍隊」や「法と支配者」の名のもとに行なわれる暴力との矛盾について書いている。彼は、アジアの人間に、消極的抵抗をすすめ、「悪」に対して「悪」でたたかわないようにとつけ加えた。そうすれば、キリスト教の失敗をアジアの人びとは、ふたたびくりかえさなくてすむかもしれないと考えたのである。

左 イタリアの画家が描いた貧しい農村生活。一九世紀の終わりには、画家たちはこのように社会悪を画題にとりあげてかいた。





右 アナキスト画家、ピサロの作品。

だれが神を作ったか？

しかし、トルストイのこの考えに、同意したアナキストは少なかった。多くのアナキストは、教会への憎しみでは同じだったが、もう一步すすんで、宗教そのものをも否定した。彼らにとって、もはや神というのは、何世紀もの間、独裁主義的神父が行なってきた詐欺を思いださせるだけのことであった。そして、宗教が行なう儀式などは、無知な人民から金を強奪するための手段にすぎないと主張した。

人は、その心が宗教から解放されて、はじめて本当に自由になれるのだ。彼らにとって迷信からの解放は無知からの解放とほぼ同一の要求であった。しかし、この人間を、非宗教的なものとみるキャンペーンは

アナキスト独特のものではなかった。ほかの多くの無神論者や反教会論者も、ほぼ同様の考え方であった。

フランスの個人主義者パラフ・ジャバルは、宗教をたった一行の文章でかたづけしてしまった。

「神が世界を創造したのなら、だれが神をつくったのか？」

またフランスのアナキスト、エミル・デジョンは、遺書に次のように書いた。

「神、天地創造主、全宇宙の支配者、これらはまったく意味のない存在だ。あらゆる宗教の僧侶たちが考えだした、だましやすい信者を利用するためのものだ。私は特にクリスチャン、またはカトリックの神を信じない。神父たちは、神父たち自身にかたどって神を作り虚栄と残酷の化け物になっ

中に、その神が人の前に現われたりきえたりする。最後に人が死ぬときふたたび現われて、もしその人間が神を十分に尊敬していなかったり、またその人に、神自身が与えたはずの本能と欲望を克服していないとわかったら、その神は非情な拷問で、その人を罰するというのだ」

同じような文章は、そのほかにも、いろいろと見られる。しかし、アナキストにとって問題は、どうしたら文章よりも、もっと強く効果的に、宗教を攻撃できるかであった。

スペインでは一九〇九年、バルセロナで見られたように、宗教的建物を汚すことがその答えであり、フランスでは、特に個人的テロリストの間では、教会所有物を盗む

ことであった。ポノの後にあらわれたフランスのギヤング、マリウス・ジャコブは、法廷で、次のように語った(一九〇五年)。

「私は多くの神父の家へ押し入った。すると必ず金庫があり、その中には金がびっしりはいっていたが、それは無知なやつらが神へ捧げた金だろう。神父たちは、それを自分のものにしやがって…、そんないかさまやろうたちが、私をドロボーと呼ぶんだぜ。だが、オレはやつらをせめるのはよそ。神の祝福を！ アーメン」

しかし、宗教的な物を汚すことや盗むことが、本来のアナキストの目的ではなかった。アナキストにとって、教会は偽善であるばかりか、同時に、道徳の監視者として個人的自由を拘束する許しがたいものであった。多くのアナキストにとっては、既成の道徳から解放されるためには、とりあえ

ず反宗教的になることであり、次により建設的な意味で、人間の抑えられた感情を、個人的にも、社会的にも健康な道へと解放することが目的であった。

フリーラブとアナキスト

一九〇五年、パリのモンマルトルに、水着しか着ていない男が、群集に裸体主義について講義するためにあらわれた。彼は水着だけ着て、家から出てくるところを、ふたりの警官につかまった。警察で、医学生であった彼は、次のように釈明した。

「人間は汗をかく、汗の中には尿酸などの有害物質が含まれている。そしてこの汗が衣服にのこり、ふたたび体内へもどる。したがってからだに有害なのである」

署長は話を聞いて、彼は頭がおかしいと思ったが、一応警察医を呼んで聞いてみた。しかし、医者は彼の話を聞いて科学的には正しいと判断した。また彼が海水パンツで性器はかくしていたので、彼を逮捕する理由はないと判断した。

「性解放の予言者」アーネスト・ルシェン(ペンネームはエミール・アルマン)は彼の行動を認めた。つまり、思想はつねに行動に移さなくてはいけないという、アナキズムの精神に忠実であるというのだった。服を着るのがいやだったら着る必要はない…と。アルマンは人間として、また作家として、当時の人びとを魅了していた。

彼の若い時代は、ほかの一般のアナキストとまったく逆だった。彼の父親はパリ・

左 アナキスト画家、シニャックの作品。



コンミュニオンで戦い、彼に、反教会教育を与えた。それにもかかわらず、彼は熱情的な信者であった。家族がロンドンに追放されていたとき、彼は一ペニーで新約聖書を買った、その中のキリストの言葉に、彼の父親の思想にはまったく欠けていた、新鮮な暖かさをみいだすのであった。彼は救世軍にはいり、彼の信仰は、確固たるものとなつた。

しかし、熱心な信者だつた彼にも、ふたつのことについて、いらいらするようになつた。そのひとつは、アナキズムとの出会ひであり(一八九五年)、もうひとつは、夫人との不仲だつた。ふたりはまったく異なつた思想を持っていたため、たびたび口論した。ついに救世軍は、激しい口論の罰として、彼の階級を下げた(一八九七年)。彼は一生このことを忘れなかつた。



きだと、彼は本の中で、ていねいに説得している。そんな彼は不真面目で、かつ不道徳的だと攻撃されるのがつねであつた。しかし、彼も負けずにがんばつた。「現在の結婚と売春とは同じようなものだ」とか「結婚は長期的売春で、売春は短期的結婚である」などといって、さらに非難者をおどろかすのであつた。

アルマンは、お互いに愛し合つている仲での完全性解放を主張しつづけたが、あまり具体的に表現したり、感情的な言葉を使つて、それが乱雑で淫奔なものにならないように気をつけていた。その一例として、性欲と生殖本能との区別について書いたものがある。

「ふたりの男女の間に、最初に愛がめばえやがてふたりが結ばれたとしても、それは生殖本能とは関係ない。それはお互いの同

彼は救世軍とも夫人とも、両方とも別れようとしたが、彼の長年持ち続けた道徳観念がじゃまをしてなかなかできなかった。しかし、チャンスはおとすれた。救世軍から二百フランの金を印刷屋に届ける任務を受けた彼は、その金を盗んでしまった。その夜、彼は、「自分を道徳の絆から解放できた喜び」にひたつた。しかし、結局は罪悪感に悩まされ、ついに、全額返してしまふのだが、そのことがきっかけで「自由とは何か」「個人主義とは何か」といった問いに對して、自分なりのひとつの解決をはかることができた。

彼は直ちにジャーナリズム活動にはいり個人主義を広めるために、努力した。そして、一九〇二年に夫人と離婚したが、これは、彼にとって自由への大きな飛躍であつた。その離婚の理由が彼の書物を理解する

鍵になつてゐる。彼の言葉によると「お互いに愛していないふたりの間の性行為は、不道徳的で不自由だ」

ここで、「不道徳」という言葉は、たんに皮肉として使われたのではなかつた。アルマンは、個人を強制している既成の道徳を否定していた。そして彼は、新しいより自然な愛と尊敬という人間のふたつの最大の価値にもとづいた道徳を主張している。すなわち、夫人との離婚の理由と同じことがマリー・クーゲルとの生活を認める理由にもいえるのだ。

「お互いに愛しあう者同士性の行為は、道徳的で、かつ自由である」

性解放は当事者の相互信頼にもとづくべ

左 ゲルハルト・ハウプトマン。エマ・ゴールドマンが口をきわめて讚美した、社会意識の強い劇作家。

情と情熱であり、性行為によつて自然に表現されるものである。一般に生殖本能は、いつたん結ばれたふたりの間に、さらに熟考を通した後生まれてくる。つまり、結論的にいえば、それは基本的欲求でも本能でもない」

そして、この区別を利用して、彼は避妊法の道徳的必要性を次のように説得した。「相手の女性の個性を尊敬する男は、女性が妊娠を望んでいないなら、避妊用具の存在を彼女に教えずにはならない。これをしてしないような男は、怠慢かつ独裁主義的な男だ」

当時は、このように徹底した個人主義的道徳を論じたものは少なく、非常にセンセーショナルなものであつた。しかし、彼が社会に起こした議論のあらはエマ・ゴールドマンの産児制限のキャンペーンにくら

べるとたいしたことではなかつた。

女性解放とアナキズム

エマ・ゴールドマンは、一八八五年に一六歳のとき、ロシア皇帝の支配下にあつたユダヤ系ゲットーからアメリカに移民したこの「自由とチャンスの国」アメリカでも見られた社会的不平等に對する怒りは、彼女を戦闘的アナキストへとかりたてた。しかし彼女の思想はしだいに戦闘的要素を失ひ、一九〇〇年ごろには、もうひとつの指導者、クロボトキンの方に近づきつつ、彼女自身のアナキスト宣伝活動のスタイルを確立していった。一九〇一年のマッキンレー大統領の暗殺は、暗殺者のレオンが、彼女の講演に出席していたというだけで、彼

女自身無関係であった。しかし、法の上では無実を証明されたが、彼女に対する人びとの中傷は変わらず、泣く子をだまらすのに「エマ・ゴールドマン」の名前を使うほどであった。

彼女は、一九〇六年、アナキズムの知的活動を広範囲に扱った「母なる大地」を発行し、そのなかで性の解放についてのキャンペーンを行なった。すでに、一九〇〇年ごろから避妊法の個人指導も行なっていた彼女は、一九一五年、大胆にも避妊法に関する公開討論会を行なった。彼女自身は子宮の位置が異常なため子どもは生めないからだであったが、労働者階級の間によく見られる「望まない妊娠」のため、力になってあげたかったのである。そして女性を奴隷化しているのは、産児制限を広めないためだと考えるようになった。

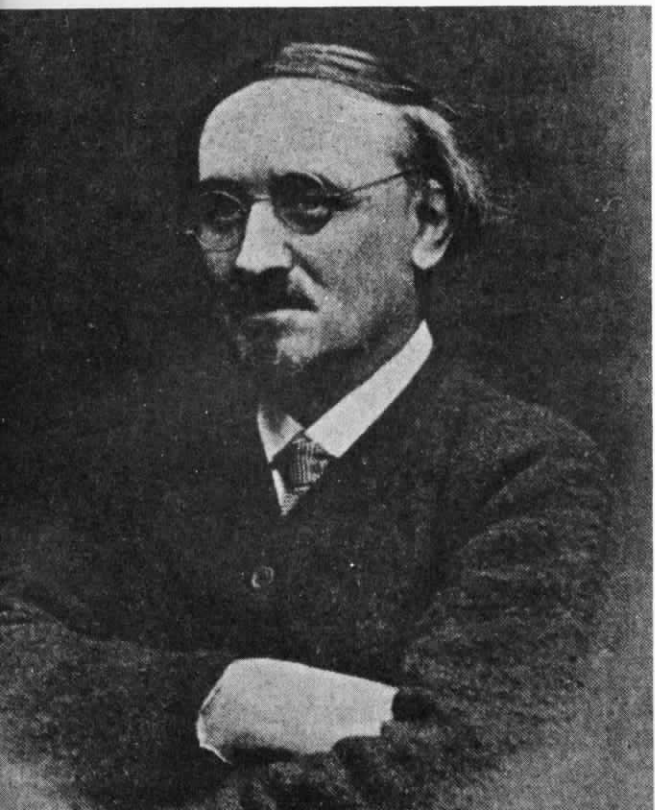
ついに、一九一六年、ニューヨークで「医学の問題」という講演を終わつたとき、彼女は逮捕されてしまった。芸術家、知識人その他、新派の人たちは、この裁判をいさんで見にきた。罰金もしくは十五日間の留置をいわれたされた彼女は、後者を選んだ。そのため、彼女のファンをさらにふやす結果となった。後にマーガレット・アンダーソンは次のように語った。

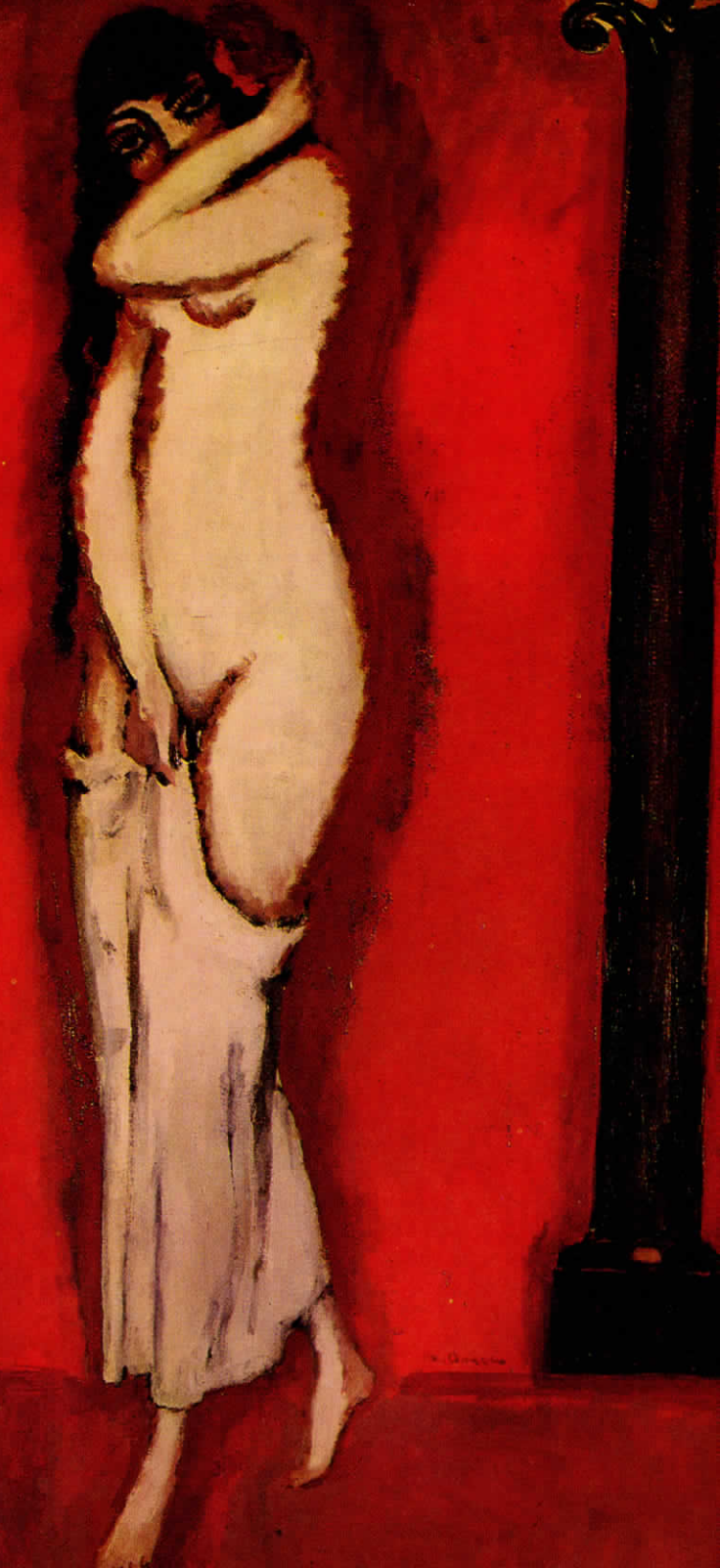
「一九一六年に、エマ・ゴールドマンは、女性には常に口を閉じ、子宮を開いていなければいけない法はない」と主張したため入獄されたのです」

例によって新聞の見出しというのは、つねに、はなやかに書きたるため、彼女も性に関して、ふしだらな女だと考えられるようになっていた。しかし、実際の彼女は、人びとはお互い、私心なしに愛し合わない

ればいけないという信念に裏付けられた、貞淑そのものの女性であった。ある男が一夜のなぐさめを求めて、彼女のホテルの室をノックしたとき、彼女は、ホテル全部を起すと、おどかした話も残っている。彼女のキャンペーンがアナキズムの要素を持つていたため、一般には不道徳的と受けとめられていたということもあるだろう。しかし、社会主義者のマーガレット・サンガーも、産児制限を同じ時代に宣教したときやはり同じように白い目で見られたのである。

左 上 避妊についての公開討論をしたエマ・ゴールドマン。左下 結婚は長期売春。売春は短期の結婚と言ったエミール・アルマン。右 ドイツの社会派劇作家フランク・ベデキン。





右 キース・バン・ドンゲンの画「柱の前の女」。自由を求めた点では、アナキズムに共鳴した画家が多かったが、完全にアナキストというわけではなかった。

ヒッピータイプ

フェレルとフォールから、アルマンとゴルドマンまで、無知と迷信と道徳的偏見からの解放を、教育的、宗教的、道徳的権力との戦いの中で求め続けた。各個人がその日常生活を通じて、自分の信念を実行に移していくこと——これが個人主義者の常道である。そして多くのアナキストは、それは実社会から離れなくてもできると信じていた。しかし、中には現実の社会から離れて、自由な生き方を試験的に行なった人びともいる。

イタリアのアナキストたちは、新天地を求めてブラジルへ移民し、アナキスト精神にもとづいた共同体を作ろうとした。しかし、二〇〇人以上の会員で構成されていた

この共同体は、貧困と内部的な意見の不一致のため、数年で失敗してしまった。クロムウェル時代のイギリスのディッカーズと同様に、後から見ると、その計画はあまりにも空想的であったが、初心は強く真面目なものだった。

一九世紀の終わりにヨーロッパで作られた、数々の共同体にも同じことがいえる。ビクター・サージはベルギーの森の中の共同体を訪問して、その理想主義のもようを回想記で、次のように書いている。

「彼らが住んでいた小さな白い家には、好きなことをしなさい」というスローガンがはってあり、庭へつながる門のそばには、彼らの宣伝用パンフレットと小銭のはいった皿が置いてあった。皿のそばに、欲しいだけ取って、だせるだけだしなさい」と書いてあった。家の中では、自由愛の利点に

ついでにディスカッションが行なわれていた。このディスカッションも、全員にひとつの結論を押しつけようとするものではなく、彼らはみな自由に働き、自由に話し合うのであった」

共同体での生活を通じて、お互いの信頼を裏切る者はなかったが、實際上、失敗に終わらせる原因を作ったのは、なんと会員どうしの、特に性に関しての「やきもち」だった。また個人の重視は、はっきりとした経済的機能を無視する結果ともなった。アナキスト共同体は経済機能をもたず、彼らの自由はどんなに誠実であっても、機能的な役割を果たせないのであった。それは共同生活の中で、個人的自由の可能性を実験しているにすぎなかった。

しかし、こうした実験的試みは、フランスでも行なわれた。一八九七年のパリに、

びつこの男、アルベルト・リベルタが、地方からやってきた。一九〇五年には、彼は「ザ・アナキー」という自由主義ジャーナルを発行し、直ちにアナキスト思想を、実現しようと呼びかけた。

「革命をまつな！ お互いに自由な人間として、共同で生活しよう」

パリの地下組織の中で、社会変革などということは考えずに、リベルタと、彼の同志は共同生活らしいことをはじめた。

しかし、例によって、最後には彼らの自由は、ひとりひとり、ただばらばらにするだけであり、リベルタ自身、つえを使っただけで、暴力をふるうようになっていった。

さらにもうひとつだけ、共同体の例をあげるなら、トルスタイン共同体がある。トルストイのいう非暴力的、農村共同体の精神をモデルとしたものであった。

アナキストたちの共同体生活が、すべて失敗に終わっているのに対して、社会主義者たちの間でも労働者共同体をつくらうという提案は、数多く出されていた。しかしそれは、つねに経済的な基盤が、しっかりしたものではないという条件がついていた。アナキストとのちがいが、はつきり出ていておもしろい。

アナキズムと芸術家

共同体にせよ、教育・道徳的自由への運動の数々にせよ、そこには、アナキストたちの意欲を感じることができる。彼らには視野がせまいこともあったし、部分的にしか物事を判断できなかったが、新しい考え方に對して、非常に柔軟であったといえよ

う。しかも、これは社会的、または政治的分野ばかりでなく、芸術の分野にもみられた。しかし、アナキズムが独自の芸術や文学を作り上げたとは、いえないであろう。むしろ、既成概念や、伝統をうちやぶっていくほかの芸術家たちに、アナキストが影響されていたとみることもできる。いずれにせよ、「自由」という言葉で表現すべきか、「アナキー」という言葉で表現すべきか、その境界線は明瞭ではない。

カミュ・ピサロという画家は印象派として、農民が背景にとけこんでいる、光の色の田園の世界を描いただけで非難された。当時、多くの印象派に好意的でなく、特にピサロはパリ・コンミュニンの事件で追放されたアナキストであるため、彼の芸術ま

左 ゲオルグ・グロツスの画「葬列」





右 ビゴアの最初の作品「ニースにて」のシーン

で疑惑の目でみられたのである。彼はアナキストの書物のデザインや画を書きつづけたとえ、それが空想的だといわれようと、それはとても美しい夢であることになりはたつた。と書いてある。しかし、一八九〇年代にはいると、印象派はそんなにめずらしくなくなり、ピサロの画も、革命的なものとは考えられなくなった。

小さな色のついた点を集めて画く、後期印象派をはじめた、ポール・シニャックもフランスのアナキストである。彼は、アナキストが作る新しい社会では、一般市民、労働者が、あらゆる芸術に興味をいだき、たのしめるようになることを確信していた。それは、彼の定義によると、アナキスト画家というものは、「ブルジョアの型にはまった物の見方をぶち破るために、彼の全人格を

ぶつつけて戦う人びと」であった。ジャン・グラープによつてははじめられた機関誌「革命」などに上記のふたりのほかに、詩人のマラルメ、画家のファン・ドングン、作家のアルフォンス・ドーデなどが、詩、画、文などをのせていた。しかしこれらの芸術家は、必ずしもアナキズムに好意的ではなく、アナキストがすべての人間に要求していた「自由」ということに関して、一致していただけであった。

イギリスでは、オスカー・ワイルドが、このアナキストの「自由」に共鳴しておりシカゴのアナキストの助命を嘆願する申請書に名をつらねたりした。また個人を解放するために、土地の所有を廃止するよう、呼びかけたりしていた。彼の書物「社会主義と人間の魂」のなかで、芸術家とアナキストは、完全個人主義を求めている点で一

致していると書いた。しかし、彼は芸術が社会的目的をもつことには反対していたため、結局、彼の情熱は芸術そのものへ捧げられるのであった。

ワイルドは最後まで自分自身の自由のために戦いつづけた人であった。その服装は慣例を破り、その態度は常識を無視し、ついに、ホモなどという理由で、法のさばきまで受けた。社会的にも村八分にされてしまったこともあった。

ここで、ブルードンの精神にかえり、絵や文学などのあらゆる芸術も、社会的役割を持たなければならないと考えるならば、ワイルドのような人間は、アナキスト社会に完全に受け入れられるタイプではなかつ

たことがわかる。そうした観点からエマ・ゴールドマンも社会的役割を持った芸術家にかぎって、彼女の本の中で書いている彼女は、特にイブセンを賛美し、「すべての社会的いかさま師を心からくんでいるイブセンは彼らの化けの皮をはいだ」と書いた。

とくに彼の劇「人民の敵」を取りあげ、「そのすばらしい劇の中で、彼はくさって死んでいく、いまの社会機構の葬式を行なっている。その灰の中から改心した男、勇敢な逆逆者が立ち上がる」と書いた。彼女のいう逆逆者は、その劇中の人物、ストックマン博士のことである。この博士は、風呂屋が沼地にあると健康によくないという医学的意見を公表しようとした。すると経済的利権や偏見が、彼をよってたかつて攻撃し、彼を孤立させてしまう。エマ・ゴール

ドマンの言葉を借りれば、彼の敵は、圧倒的多数であり、町の繁栄のためには「嘘」と「詐欺」を何とも思わない「不謹慎なやつら」なのである。彼女は、この劇を言葉の限りをつくして賛美するのであった。

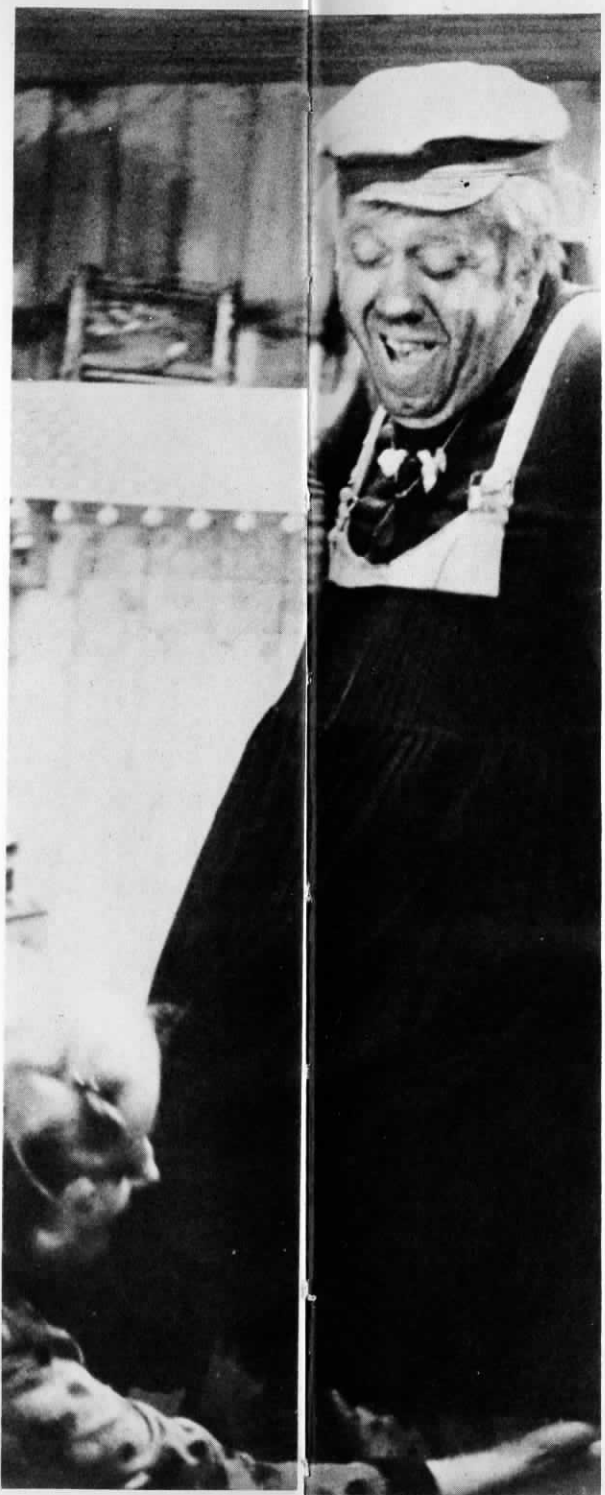
映画製作者、ジャン・ピゴールは、彼の父親の影響から、アナキスト思想を受けつぎ映画の中で、社会の不平等を告発していった。彼の映画「ニースにて」では、金持ちのからだどとスラム街の栄養失調のみにくいからだを比較して見せた。また学校の厳格な校則に生徒が反逆するといったストーリーを喜劇にした作品「ゼロの用法」は、あきらかに、アナキズムの声明書だった。俳優には、アナキストである彼の友人が出演した。この映画は直ちに、フランス政府によつて上映を禁止されてしまったが、専門家の間では「力作」と評されている。こ

最近の映画、「もしも……」はこの映画からヒントを得たものである。彼のもうひとつの大作「アトランタ」は、甘い恋愛をテーマにしていたが、やはり、その中には、パリの労働者の苦難をハイライトして、社会批判を組み入れている。彼自身、次のように話している。

「義務を怠った社会の終末を映画に表現しているのだ。そして、私の映画はやがて、人びとを革命的解決法へとかりたてるであらう」

しかし、彼のいう「解決法」は、はつきりしないまま、彼は二九歳でその短い一生を閉じたのであった。

左 ビゴールの最後の作品「アトランタ」。この映画は、甘い恋物語の中に、失業問題をからませ、すごい社会批判をもしている。



芸術活動の中でも、その情熱を注いだアナキストたちは、新しい思考と創造を目ざした二〇世紀初期の芸術革命の中の、大切な一部をしめているのである。多くの人びとは、アナキズムの「破壊的」な側面は「自由」とは、まるで逆なものとすらみえたが彼らの創造的な芸術活動を無視したら、ア

ナキズムの本質的な一面を見落としてしまうだろう。

アナキストたちは、無知と迷信と道徳的偏見からの解放を求めたように、芸術の中でも、その伝統とか正統派といった既成の美意識からの脱却を求めたのであった。

彼らは、たしかに少数派であった。だが、

アナキズムをひとつのモザイク作品にたとえるなら、彼らは、標準より小さな一粒であるかもしれない。しかし、その色彩は、あざやかで、しかも一段と冴えかえった光芒を放っているように見える。